

トランプ、マージャンなど好きなこととして抑留生活を送り、内地への帰還命令が出るのを待った。

二十一年三月五日帰還命令が出る。皆飛び上がり大喜び、兵長となり、十八日洛陽を出発した。汽車の無蓋車に乗車する。すし詰で昼夜走り、小便是車の中で用を足す。下車すれば住民が来て持ち物を剝奪する。

徐州、南京と上海の収容所に入る。

嚴重なる私物検査を終了し二十九日輸送船に乗船、四月一日博多上陸、四日午前七時復員した。出征後、妹が十八歳で死亡していた。帰郷して一家の柱として生活も安定し、結婚して三子の父となる。

軍隊の想い出

東京都 岸 野 善 高

今から五十五年も前に逆戻りします。

昭和十年十二月一日、禁厭守護の名督ある近衛歩兵第一連隊第七中隊に入隊、各個教練から小・中隊に及

ぶ教育訓練、武技を受けました。いよいよ第一期の検閲という朝まだ暗き昭和十一年二月二十六日午前五時、非常呼集の喇叭が鳴り響く。すばやく飛び起きて軍装を整え、営庭に整列、直に待機、弾薬などが支給された。

朝食を済ませてもまだこの状態が続き、他部隊が続々と進入してきた。何か起ったのだらうと戦友達とひそひそ話している中に、ようやく事の真相が判明した。歩三の安藤大尉が指揮する将校、百余人が首相官邸に進入、これを狙撃し、目下当時の宮城に向かって進撃中との情報が入った。

我が連隊は皇居をはじめ広場ならびに付近一帯の警戒の任に当たるべしとの命を受け、それぞれ任地についた。我が第七中隊は代官町新道及び竹橋方向を厳に警戒、反乱軍は参謀本部前から我が陣地に向かって砲列及び機関銃等で陣地を構築しているとのこと。薄気味悪いほど垂れ下がった九重の空はどんよりと曇り、この時代にしても珍しいほど朝から降り積もった雪は膝上までも没した。この中で飯盒の凍った飯を食べ、

長い一夜をこの土のうに寄り添って警戒する。将校がただ一騎、するするすべりながら往来して、敵の陣地を探り合っている様子だった。

中隊長は「いよいよ皆の死ぬ時が来た。急いで実家へ遺書を書け」といわれ、入隊後三ヵ月足らずで散る時が来たのかと覚悟した。

第七中隊長は靖国神社に待機する敵一個中隊に直談判をし、決着をつけ、さらに退陣するように説得する。なお、大川と小林両准尉も駆けつけ、これに呼応したのである。両者が発砲せんとする寸前、香椎戒嚴司令官から「兵に告ぐ、今からでも遅くはない。兵は速やかに屯営に帰還する」ようにという檄をとばされ、飛行機より地上にも配布されるなど遠い昔の事件が夢のごとく甦ってくる。

思えば実に古いことであると同時に国の大事件の一つ、いわゆる二・二六事件の真相である。この時二十七日の午後三時頃であった。我が連隊はこの日は皇居周辺を固め、九段下に戒嚴司令部をおき、付近一帯の戒嚴態勢を固め、翌々二十八日に帰営し、これより連

日の大宮御所初め各宮家の警備には一ヵ月半位これに服務した。

戒嚴令は確か五月初旬で解除になった覚えがある。

当連隊は四月十日頃より富士裾野の野営出張に出かけ、小生は風紀衛兵（後の内務衛兵）として残留勤務を命ぜられ、四月二十九日上番、田安門御兵（九段下の坂上）として立哨しました。その時、午前二時怪しき黒い人影を濠の水の中に複数発見、直ちに衛兵所に報告逮捕した行為により、連隊帰営後、将兵全員命課布達式の時に連隊長より表彰状を授与され、中隊長以下幹部初め賞讃の言葉を交わされました。今その時の感激を思い出します。

それから間もなく、二年兵が除隊してわれわれの時代になり、代々木原頭や習志野原の演習、戸山ヶ原の射撃演習など数限りない演習の中でも秋季演習が最も憧憬的であった。

軍国華やかなころであったので「兵隊さん、兵隊さん」と最高の待遇をして貰い、誰も疲れを忘れて張り切って大いに意気を高揚したものであった。

秋季演習は埼玉の寄居の方から越生、秩父、そして群馬県の安中へ行つたかと思うと、神奈川の大山の方から山北、松田、寒川の方へと、それは広範囲にわたつて追撃戦もすれば、斥候にも出される、歩哨線も張る。軍律厳しい近衛連隊の話を聞き、他の連隊と比較すると雲泥の差があつたように感ぜられた。そうこうしているうちに、昭和十二年五月除隊ということになつた次第です。

この頃から満州事変に引き続き十二年から支那事変の勃発、動乱軍部の圧力により日を追つて支那事変も苛烈になり、召集も次第に多くなり、小生も昭和十四年九月動員下令となりました。

九月二十日宇品港出港、二十四日上海上陸、そして中国の山岳戦に向かつた。たんばの中で近歩一から召集をされた組だけが本間師団に編成され、第一線に向かつた。現地へ到着するまでどこだか不明のまま連日強行軍で、十日ぐらい経過したところ、広漠とした秋蕎麦畑へ出る。すると上に隠れていた多数の敵兵が、高い処のトーチカ式陣地から我々のいる蕎麦畑へ向け機

関銃を盛んに打ち込んで来る。不意のことで、どうする暇もなく、ただ蕎麦畑の中へもぐり込むように伏せたり匍匐した。

弾はビュンビュンパチンパチンと耳もとではね、上を通る弾がビューンと我が上を通る。畑の畦へ大勢で転げ込む。この時、八王子の松本少尉は咽喉へ貫通を受け負傷、他の戦友達も数多く戦死した。漸く山へ登りはじめると遙か彼方に無数の敵が右往左往して支那語で何か喋りながら前進してくる。我々は「この敵を包囲すべし、右の方より迂回せよ」との命が下り、登つて見ると高い山である。

中国の山は一寸したように見えても海拔四、五百メートルある。大蔣南方高地の戦闘である。これより二、三日過ぎ山また山の山岳戦です。これまでの疲労に加え、またも山岳戦だということで兵一同ゾットしていたが、今日はこの間よりさらに高い山である。老樹が立ち並んでいるように見えるが、それがくせものである。一同元氣を出せと中隊長に気合いを掛けられるが、それどころではない。白い岩石を並べたような岩

肌、ここを照りつける晩秋の中国はまだまだ暑い盛りである。何としても咽喉の渴きは筆舌に尽くせぬ。中国人を苦力に弾薬運びに使ったら、兵の捨てた缶詰の空き缶を拾ってこの底の方へ土を入れ、そして自分の小便をいれてこし（土でこす）そしてこれを飲む。一息ついたような顔をみせ、元氣になったようであった。登りつめると敵は蜂の巣のような大軍である。中国の暑い夕日にまっ赤に染まって何ともいえない山に沈む景観があるが、それどころではない。こちらは突撃を敢行する決意をした。いよいよ薄暮である。

ガスの中から声がかすかに聞こえてくる。「突撃ヨーイ」と中隊長が真つ先に跳んでその後には横隊となり、一斉に前進した。弾は容赦なし、ピューバチンバチンと上を通る。銃剣をかざして走りに走った。敵もさるものながらいささか損害を蒙つたらしく銃声も下火になって来た。この時、八王子の松本小隊長は第二回目で名譽の戦死を遂げられた。自分ながら生きているのが不思議なくらいである。実にこの時の状況こそ戦った者のみが知る実状である。

その夜、下山して少し麓でまどろみ休憩したが、前日からの咽喉の痛みと渴きで泥水が清水に見え、皆浄水錠も入れずに水筒ですくって飲んだら、実は雨上がりの泥水のようなもので全員途端に腹痛（大腸炎）を起した。これからはクリークの水は絶対飲んではいないと衛生兵からもよくよく注意させられた。

この戦いは張家岩西方高地の戦闘で、後で聞くところの辺でも随一の高山だったとのこと。なお最大仕掛けの戦闘は粵漢線部及び通城に向かう追撃戦で、南京及び武昌の残敵の掃討に重点を置き、我が中隊は生き残った者を総動員して小川の両端にある草叢や小さな川など七、八日位でこの敵を撃滅した。食料もなく先日の水飲みで全部腹痛、世間でいう大腸炎であった。少し歩けばすぐ用便に出る。

久し振りの少憩で小川の辺りで軍靴を脱ぎ、皆が一斉に草の束子でこすって、国を出て以来初めて足の洗濯をした。こんなことも家を出てからの試練であった。ひげは伸び放題、衣服は汚れ乞食よりも中国人よりもひどい姿であった。この時、兵站本部より鱒が到着、

帯剣で切り塩のざらざらしたのを生のまま食したことも初めてである。また、野戦では放し飼いの黒豚を銃で打ち、馴れた者が料理番となって戦地ならではです。また、蜜蜂の養蜂があり、蜜に舌鼓を打ったこともある。

我が中隊が甘藷を掘って、もう少しでふかし上げる処を出発の命が下ったり、後から行って先行の部隊の芋を食べることもある。十一月中旬頃でも陽気は暑く、蟬が夜の九時頃まで啼いている。

また、同郷の人に会ったときの喜びは真実に戦地ならではのことです。そしてこの年の十二月から北支に移り部隊本部の連絡及び唐山市滦県という処の駅の警備となりました。駅での物売りの姿など総てが面白い。

十五年七月召集解除。

昭和十五年四月二十九日、以上のような活躍により旭日章を賜りました。

昭和十七年五月には再度召集あり、原隊にて現役兵及び補充兵教育に当たり、十八年当時は対空射撃等に重点を置く。最も重要な近衛儀仗兵勤務には万全を期

して御奉公の誠を捧げました。

そして昭和十九年四月召集解除と同時に八王子防空監視隊小宮監視哨長として服務、現在高齢化社会の一員として活躍を続けています。